



Title	コンテンツツーリズム研究会の開催に寄せて
Author(s)	山村, 高淑
Citation	「コンテンツツーリズム研究会・第1回総会・第1部」配布資料. 2010年11月27日. 於旧鷺宮町議会議場（埼玉県久喜市）
Issue Date	2010-11-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44380
Type	proceedings
Note	(主催) コンテンツツーリズム研究会・鷺宮商工会 共催 (後援) 埼玉県, 久喜市
File Information	Washimiya Contents Tourism Charter 20101127.pdf



[Instructions for use](#)

コンテンツツーリズム研究会の開催に寄せて

山村高淑

deko@sd6. so-net. ne. jp

■御礼

この度、鷲宮商工会様の全面的なご支援を賜り、ここにコンテンツツーリズム研究会を立ち上げる運びとなりました。まずは、今回の研究会の開催に際しまして、多大なるお力添えを賜り、このような素晴らしい研究・交流の場を与えて下さいました、齋藤勝会長はじめ、鷲宮商工会の皆さま、会員事業所の皆さま、久喜市鷲宮総合支所の皆さまに心から御礼を申し上げます。またご多忙の中ご参集賜りました会場の皆さま、本当にありがとうございます。

後程詳しく申し上げますが、本研究会は会長や役員を置いておりません。メンバー全てが対等な立場で参加しております。ですので、私自身、代表でも何でもございませませんが、メンバーの皆さまからのご指名がございましたので、僭越ながら、発起人のひとりとして、本日はご挨拶申し上げる次第です。

■コンテンツツーリズムとは？

人は物語（＝コンテンツ）を求めて旅をします。そしてある物語を共有したとき、人と人は交流をすることができます。このことは「旅」の持つ文化的な本質のひとつです。

現在、旅行市場は成熟し、人々の趣味や嗜好の多様化にあわせて、旅行市場自体も細分化してきています。それに従って、旅行者や自治体も、コンテンツを求めるといふ旅の本質に気付き始めています。観光資源とは単なる“モノ”ではなく、その奥にある、地域の“物語性”であるということに気付き始めたのです。言い替えれば、その土地の持つ世界観や、その土地を舞台にした作品や歴史の“物語性”に浸る旅のあり方、そしてそうした“物語性”を他者と共有することで生まれる交流のあり方に注目が集まっているのです。私自身は、こうした旅のあり方を「コンテンツツーリズム」と呼びたいと考えています¹。

¹ 2005年、国土交通省・経済産業省・文化庁が共同で「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」報告書を取りまとめています。この中で「コンテンツツーリズム」という用語が用いられているのですが、具体的には「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、マンガ、ゲームなど）を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」と定義されています。そして、その「根幹は、地域に「コンテンツを通して醸成された地域固有の雰囲気・イメージ」としての「物語性」「テーマ性」を付加し、その物語性を観光資源として活用すること」と記されています。本研究会では、映画、テレビドラマ、小説、マンガ、ゲーム以外にも多様なコンテンツがあるとの立場をとり、この国交省・経産省・文化庁による定義より広い観点からコンテンツツーリズムを捉えていきたいと思えます。例えば、歴史コンテンツ、ヘリテージコンテンツ、等々。

■まちおこしとは？

一方、「まちおこし」という言葉も良く聞かれるようになりました。ある地域を活性化させるための取り組みのことを一般にこう呼ぶことが多いのですが、私は、特に以下のように具体的に定義することで、論点を明確にしていきたいと思っています。

「その集団、あるいはひとりひとりが持っているもの（自然環境、文化遺産、創造性など）を、集団内や他地域の人々と交流することによってより豊かにしていくこと」²。

■鷲宮とコンテンツツーリズム研究

2007年に始まった旧鷲宮町の『らき☆すた』をきっかけとしたまちおこしは、こうしたコンテンツツーリズムが顕著に展開した好例で、全国自治体のまちおこしのあり方にも大きな影響を与えました。特に、『らき☆すた』ファンの皆さんと地域の皆さんとの交流・協力関係がまちおこしの大きな原動力となったこと、商工会さんと著作権者とが双方の利益に配慮したコンテンツ活用モデルを構築したこと、様々な関係者をどんどん巻き込んでいくことで次々と新たな文化が創造されていること、などは、今後の交流型まちづくり、地場産業振興、コンテンツ産業振興を考えていくうえで、関係者に大きな示唆を与えています。

■研究者の「聖地」として

こうした背景もあり、鷲宮にはコンテンツと旅、そしてまちおこしに関心を持つ若手の研究者の皆さん、学生の皆さんが集まるようになりました。今回のコンテンツツーリズム研究会の立ち上げは、こうした皆さんの有志と商工会の皆さんが中心となって、研究成果を持ち寄り、地域に還元することを目的として設立されました。いわば、若手研究者の「聖地」として、ここ鷲宮を研究・交流の核、研究成果の蓄積場所、としていきたいと考えています。地域空間そのものが大学で、住民の皆さんが教授である、そして成果をみんなで分け合う、という研究のあり方を目指したいと思います。

■研究会設立の目的

したがって、本研究会は、既存の大学や学会とは、そのあり方を異にします。そして、大学や学会にできない活動を展開していければと考えています。具体的には、地域の皆さんとともに、

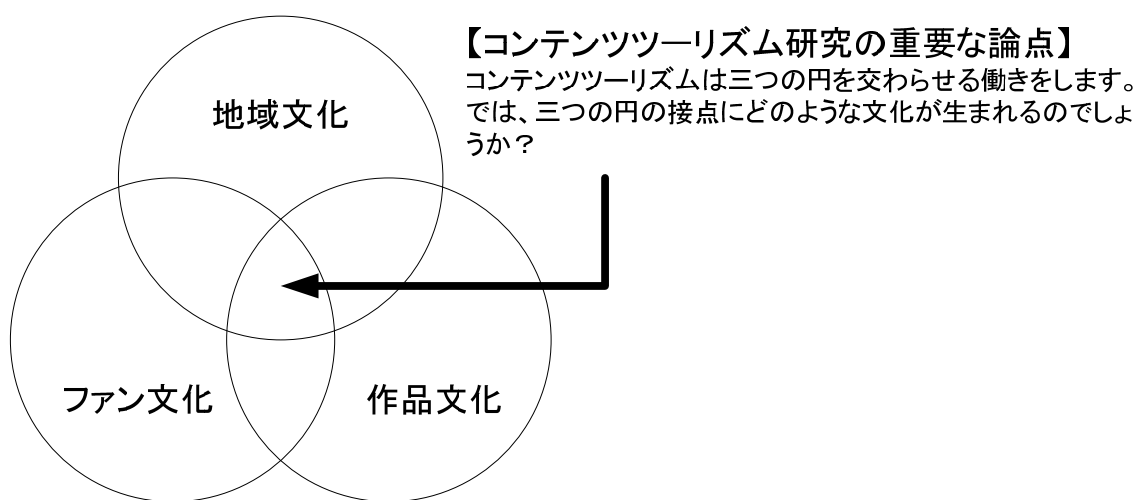
- ・ コンテンツと旅との関係性
- ・ コンテンツを核とした交流のありかた
- ・ そうした交流を通じた「地域住民の皆さん」「ファンの皆さん」「著作権者」が協力した

² The Dag Hammarskjöld Foundation, 1975, *Dag Hammarskjöld Report on Development and International Cooperation 'What Now'*, prepared on the occasion of the United Nations General Assembly (New York, 1 to 12 September, 1975), the Dag Hammarskjöld Foundation. を参考に定義。

形でのまちおこしのありかた

といったテーマに関する議論を通して、

- ※ 「地域文化」×「ファン文化」×「作品文化」の接点で、交流を通してどのような新しい文化が創造されるのか？
 - ※ 「地域住民の皆さん」「ファンの皆さん」「著作権者」の三者それぞれが、それぞれの持つコンテンツ（物語）をより豊かにしていけるような、旅のあり方、地域振興のあり方とはどのようなものなのか？
- を模索していきたいと思います。



■研究会をより実りあるものとするために…若干のルール

以上のような背景と目的を踏まえ、発起人一同は、研究会を進めていくうえでの最低限のルールと方針を、当面以下のように設定しておきたいと考えます。何卒ご理解とご協力のほどをお願い申し上げます。

- (1) 個人のための研究の場としない。自分個人の研究業績をあげることに活動の主眼を置かない。研究活動・成果を、地域に還元することを主たる目的とする。
- (2) 小規模な町や村、商店街、個人事業主さんなどに役立つ議論を心掛ける。そのために常に地域の皆さんと良好な協力関係を築く。
- (3) 「地域」と「コンテンツ」に対する敬意と愛情を活動の基盤とする。両者に対してマイナスになる研究活動はしない。
- (4) 既成の学問体系や、特定のテーマ、職業・所属、肩書、年齢、性別等にとらわれない。共通の関心を抱く人々が自由に意見交換できる場とする。特に学部生、様々な立場の人が、自由に発表し合える場とする。テーマに制限を設けない。

- (5) リーダーを設けない。事務局や世話役は設置するが、特定の個人に権限を集中しない。
- (6) 身の丈にあった活動をする。活動の適性規模を保ち、できることを地味にやる。
- (7) 出入り自由とする。常に他者に開かれた会とし、他のメンバーに関わり過ぎず、無関係にもならない、ゆるい繋がり方を目指す。
- (8) 組織の存続を目的としない。常に活動の目的は何かを認識し、組織の存続を目的化しない。必要が無ければ、いつでも解散する。

■黒子としての研究者

いずれにしても、コンテンツとはあくまでも庶民の文化であり、自由に花開くからこそ面白いのだと思います。ですから、行政はそれをコントロールしたりマネジメントしたりするのではなく、支援の仕組みや受け皿づくりといった黒子に徹するべきだと考えます。また大学や研究者も、地域にお邪魔させていただいているということを忘れずに、対象を謙虚に研究し、その成果を常に主役である地域の皆さんに還元していくという、これまた黒子に徹することが重要なのだと思います。

以上、偉そうなことを申し上げてしまいましたが、この度の試みは、全く新しい試みであり、今後いろいろと失敗を重ねていくことと思います。どうぞ、関係各位におかれましては、暖かい目で若手研究者の活動を見守っていただき、叱咤激励を頂ければ幸いに存じます。

今後の皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げまして、簡単ではございますがご挨拶とさせていただきます。

(了)